

方丈記を通して見たる長明と浄土教の思想に就て

高 津 量 海

時代を離れて其の人、或は其の作品に就て語り得ない。今方丈記に表はれた鴨長明の思想を浄土教を通して論じやうとするに先ち、當時、即ち平安朝末期より鎌倉時代の本邦史上稀に見る暗國時代を一瞥しやう。

一

桓武帝都を京の地に定め給ひてより、天下大平光輝燦爛たる貴族的、遊戲的平安文化を現出するに至つた。「この世をばわが世ぞ思ふ望月の缺けたるここの無しと思へば」この道長の歌こそ實際それが當代のユートピアであり、享樂と利己を中心とした時代の象徴であつた。左様した時代に生れた文化は其の根底を佛教に置き、文學は内容豊かな經典の章句を假りて始めて價值付けられたのである。比屋根安定氏著「日本宗教史」(四〇八頁)にも引かれて居る様に「十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじうたうし、日日に供養せられ給ふ。御經よりはじめ、玉の軸羅の表紙帙簀のかぎりも、世になきさまに整へさせ給へり。さらぬ事の清らかに、尋常ならずおはしませば、まして道理なり。佛の御莊嚴花机のおほひなごまで、まことの極樂思ひやらる。(源氏物語、賢木巻)ミ、又の章に「春のおごきのお前、こり分けて梅の香もみすの内の匂に吹きまがひて生ける佛の御國ミおほゆ」「大將の御句さへ薰りあひ、めでたく極樂思ひやうる、花のさま」ミ、「枕草紙」は「見ぐるしきもの、法師、陰陽師の紙冠

して滅したる」「あでなるもの、水晶の珠數」「陀羅尼はあかつき、讀經はゆふぐれ。あそびは夜人の顔の見えぬほき」^三、殊に「榮華物語」の「聲尊き人人に經なぞ讀ませて夜一夜あそび給ふ」^四なぞに至つては享樂信仰の極至であるかくして佛教は文學に玩ばれ古扇經の流行さへ見、當時の教典は國家鎮護に藤原氏繁榮の祈禱經にしか過ぎなかつた。左様した中にあつて、木鐸の感あらしめたのは、菅原道眞の「人慚地獄幽冥理、我泣天涯放逐事、佛號遙聞知不聞、發心北向只南無」の詩である。北向云々は北^註背右脇の思想より來るならん。而して宇多天皇の朝に、唐留學中の僧中瑾、唐不振の狀を報じ、遣唐使停止の旨奏するあり、道眞の上奏にて將に出般の途にあつた、參議左大辨菅原道眞大使、及、紀長谷雄副使の入唐は取止めとなり、寛平七年五月、遣唐使廢止の勅下るや、日支の交通一時杜絶し、我國文化は模倣を去り獨自の發展を見、宗教界では、日本淨土教勃興の基をなすに至つた。其後道眞怨靈の祟を中心に祈禱佛教全盛時代を産み（日本紀略延喜十三年三月十二日、及延長元年三月廿一日の條、「大鏡」北野天滿宮緣起等參照）次で、平將門、藤原純友の「天慶の亂」より武士の起りとなり、さしも榮えた藤原氏も、望月の缺けるが如くに衰微の運命を辿るに至つた。武家政治への過渡期として暫く上皇、法皇の院政時代が續いた。其の間「愚官抄」の著者をして「道理以外なり」^五と嘆せしめた、骨肉相喰む、義朝父子、兄弟の非人道的争ひがあり、續いて源平の争奪戦に移り、聽て政權は鎌倉に移り、桓武帝後さしも、みやびと尊嚴を誇つた、玉敷の平安京も兵馬の蹄下に蹂躪され、加ふるに天災地變、大火、飢饉等鬭爭堅固の末世を如實に見るや、世は擧げて「末法到來、末法到來」^六と五濁惡世の現世穢土を厭離し、時世の救濟者時局の荷擔者を求める思想が、英雄待望となり、戦争文學の發生を見、聖人崇拜より濃厚なる彌陀信仰となり、人心は擧つて、易修易行、機教相應の法然の念佛門に趨れるは當然の結果である。左様した佛教の向轉期を、宗教家はルーテルの宗教改革と比較し（富森大梁氏、鎌倉時代研究三三二頁）文學者をして「日

本に於ける第一のルネッサンスなり」(西田直二郎博士、鎌倉時代（代の文化に就て四八八頁）と評せしめたるも蓋し宜なる哉である。かゝる時代の代表的著書として、水鏡、保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、古今著聞集、宇治拾遺物語、十訓抄等があり、殊に清少納言の枕草紙、吉田兼行の徒然草等と並んで隨筆文學の上乗たるは、吾が鴨長明の方丈記である。著者に就ては異説あるも其れは後章に譲る事として、長明の傳記を略述しやう。

二

鴨長明の傳記も漠として明で無いが、日本文學大系讀本は「系圖纂要」を引いて長明の出生を仁平三年とし「鴨縣主家傳」の建保元年六十二歳歿とあるを換算するに仁平二年に生れた事になるが一般に「方丈記流水抄」の「久壽元年甲戌に産れ、建保四年丙子六月八日寂す、六十三歳」の説を採る様だ。彼の傳は流水抄、吾妻鏡(吉川本)殊に家長日記、に詳して見えてゐるが、比較的整頓された「十訓抄」第九可停懸望事の七節には次の様に出てゐる。

近比鴨の社の氏人に、菊太夫長明イ南といふ者ありけり。和歌管絃の道、人に知られたりけり。社司を望みけるが、かなはざりければ、世を恨みて出家して後、同じく先き立ちて世をそむける人の許へいひやりける。

いつくより人は入りけむまくす原

秋かせ吹きし道よりそこし

ふかき恨の心のやみは、しばしの迷ひなりけれど、己の思ひをしもしるべにて、まことの道に入りけるこそ、生死涅槃と同じく、煩惱菩提一つなりけることわりたがはざりけり。方丈記にて、かなにて書き置けるものを見れば始めの詞に「行く河のながれは絶えずして、しかもこの水にあらず」とあるこそ「川閑水以成川。水滔々而日度。世閑人而爲世。人冉冉而行暮」といふ文をかけるよとおぼへて、いさあはれなれ。然して彼の庵にも、を

り琴、つぎ琵琶などを伴へりけり。念佛のひま／＼には、糸竹のすさびをおもひすてざりけるこそ、すきの程いゝやさしけれ。その後もこのごま／＼、和歌所の寄人にて候ふべき由を、後鳥羽院より仰せられければ、沈みにき今さら和歌の浦波に

よせはやよらむあまの捨て舟

と申して、終に籠り居てやみにけり。世をも人をも恨みけるほごならば、かくこそあらまほしけれ。

とあり、新古今集、雑下に

身の望かなひ侍らで、やしろのまじらひもせで、こもりゐて侍りけるに、葬を見てよめる。

見れば先ついで、涙ももろかつら

鴨 長 明

いかに契りてかけ離れけむ

とあり、又吾妻鏡、第十九「建暦元年十月十三日」の條に、

十三日、辛卯、鴨社氏人菊太夫長明入道法名蓮胤依ニ雅經朝臣之舉二、此間下向。奉レ調ニ將軍二及ニ度度二云云。而今日當ニ幕下將軍御忌日一參ニ彼法華堂一念誦讀經之間、懷舊之淚頻相催、註ニ一首和歌於堂柱一。

草木モ靡モ秋ノ霜消テ空キ苔カ拂フ山風

とある。要之、長明姓は鴨、通稱菊太夫とて、近衛朝仁平二年壬申（紀元一八一二）鴨社の禰宜鴨長繼の次男として生れ後、後鳥羽院の御意向にて、鴨河合社の禰宜たる御内意迄あつたが、惣官藤原祐兼の子祐頼に奪はれ、藤原氏の横暴を憎み且世を果なんぞ出家し或時は大原山に、又は日野に隱遁して再度世に出ず、建保四年に歿したらしい

（吉川秀雄氏、新譯方丈記精解、三上参次高津敏三郎共著、日本文學小史下巻、日本文學大系讀本、讀本方丈記參照）

其間長明の著書としては、四季折々の自然を描寫せる「四季物語」一卷（日本文學全書、續羣書類）又慶滋保胤の往

生極樂記一卷（新校羣書類從本第三卷及羣書類從第四輯三九九頁）大江匡房著續本朝往生傳一卷（羣書類從本第四輯四一六頁）等に似せた求道談、往生傳を集め

た「發心集」八卷（大日本佛教全書、第十二卷納）和歌に對する評論文なども見られ、歌壇研究の好資料たる、「無名秘抄」二卷

（羣書類從本第十三卷、日本歌學全集第十二卷、歌學文庫第二卷納）等其他歌人としての彼は、千載集に一首、新古今集に十首、續古今に二首、續後拾

遺に一首、新續古今に二首收められ、尙其等を組織立てた彼の長明集一卷には、春の部十一首、夏の部十一首、秋の部二十二首（内一首缺）冬の部十七首、懸の部二十四首、雜の部二十首、合計百五十首を收めてゐる。（新校羣書類從本十二卷國語

國文學第五十八號鴻集。次田栗原共纂歷代和歌抄六八頁）

三

方丈記の題名は「住居はすなはち淨名居士の跡をけがせり」や「桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす」等より出でたるは明である。流布本方丈記は普通左の十二章段に分たる。發端、安元の大火、治承の辻風、福原遷都、養和の飢饉、元暦の大地震、世にありにくきこと、出家、末葉のやぎり、外山の閑居、閑居の氣味、靜かなる曉がそれである。又豊田八十代氏の如く、維摩經と對照して教典的に、發端を序分「安元の大火」より「世にありにくきこと」迄を正宗分、以下流通分、と見るのも面白い説である（國語、國文學五十八號維摩經と方丈記）先づ前提として世の無常を掲げ次に其れの例證を行ひ而して結論に及べる點などは一の小論文である。

第一章段の「行く川の流は絶えずして」より「消えずといへぎも夕を待つことなし」迄は、長明の主觀の告白としての無常觀である。引用語句に註釋を加ふれば、流水の例は古註にもある如く「子在川上」曰、逝者如斯不_レ舍_二書夜_一（論語子罕編）の引用であり、前記傳記中の十訓抄の章句もその一例である。「水の泡にぞ似たりける」は維摩經

方便品の十喻、「是身如聚沫不可撮摩。是身如泡不得久立云々」(國譯大藏經第十卷)其他、千載集に

維摩經十喻此身は水の泡の如し云へる心をよみ侍りける、

前大納言 公任

こゝに消えかしこに結ぶ水の泡

浮世にめぐる身にこそありけり

こもある、其他法華隨喜功德品に「世皆不牢固如水泡沫烟云々」金剛經に「一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀云々」涅槃經に、「人命不停過於山水今日雖存明亦難保」其他首楞嚴の十喻も維摩經のそれに似たり。次に「無常を争ひ去るさま、いはゞ朝顔の露に異ならず」も豊田八十代氏は維摩經十喻の「是身如芭蕉中無有堅」の芭蕉を朝顔に變へたのだ云つて居られるが、こゝうした、諸行無常。是生滅法。生滅滅已、寂滅爲樂、云つた風な佛教特有の思想は經典中には多數見えてゐる。善導の六時禮讃の無常偈云ふのもあり。中夜禮讃偈中にも、「諸有無常無我等亦如水月電影露、爲衆說法無名字云々」日没無常偈に、「人間患患營衆務、不覺年命日夜去、如燈風中滅難期忙忙六道無定趣云々」後夜無常偈に「時光遷流轉、忽至五更初、無常念々至恆與死王居云々」日中無常偈に、「人生不精進、喻若樹無根、採華置日中、能得幾時鮮、人命亦如是、無常須臾間云々」又玄奘三藏の西域記にも、「何唯電光朝爲短時身。僧祇耶劫若干植苦種」こもあり、尙法然の人命無常を説ける文に、「それあしたにひらく榮花はゆうべの風にちりやすく。ゆうべにむすぶ命露はあしたの日にきえやすし」こあるなぞそれである

第二章段、安元の大火の條に「去にし安元三年四月二十八日かきよ」火もこは樋口富小路とかや。病人をやませる假屋より出で來けるこなん」(この火元に就ては源平盛衰記卷四、「京中燒失の事」の條に詳しい)述べ「七珍

萬寶さながら灰燼さなりにき。そのつひえいくそぼくぞ」を驚き、「人のいみなみ皆おろかなる中にさしも危き京中の家を造るにて寶を費し心を悩ますことはすぐれてあぢきなくぞ侍るべき」を諭して居る點など、佛遺教經の思想を符合し、又「七珍萬寶はくらにみてれぎも益も無し」の法然の御法語等を思はせ、此處にも諸行無常の一端を披歴して居る。

第三章段は、「また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きな辻風起り」に始まり「地獄の業風なりともかくこそはごぞ覺えける」を慧心の往生要集を引きくらべ恐怖し、「さるべきもののさしかな」をほのかに末法到來を警告してゐる。

第四章段は「また同じ年の水無月の頃、俄かに都遷り侍りき」を福原遷都の狀が述べられて居る。流布本本文の「大かたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時、都さだめ」もあり、又「悉く畿津の國難波の京に移りたまひぬ」もあるは作者の思ひ違ひであらう。前者は嵯峨天皇の御父桓武帝であり、後者は史實上今の神戸の地福原であらねばならぬ。「羣書類從」(本朝皇胤紹運錄の安德天皇)の項に、

安德天皇、治承二、十一、十二、降誕、同年十二、八爲親王、同月十五立太子。同四、二、廿一、受禪四、廿二、即位紫宸殿、同六、二、遷都福原、十一、廿六遷幸平城(安歟)宮云々」

とあり、尙「大日本史、卷五十三、本紀第五十三、安德天皇」の條に精しい。又「衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都のてぶり忽ちに改まりて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは、世の亂る、端相さか聞きおけるもしるく」を重ねて鬭諍堅固の末世到來を豫告して居る。

第五章段の「養和の飢饉」の狀に至つては酸鼻を極め、さながらも餓鬼地獄そのものである。「乞食道のべに多

く、愁へ悲しむ聲耳に滿てり」「世の人皆飢ゑ死にければ、日を經つ、きはまり行く様、少水の魚のたゞへにかなへり。ミ「文珠出曜經」卷十八の「佛說頌曰是日已過、命則衰滅、如少水魚。斯有何樂」(往生要集にも見えたり)を引き、「はてには笠うち着、足引きつ、み、よろしき姿したるものひたすら家ごに乞ひありく。かくわびしれたるものごもありくかみ見れば、すなはちたふれ死ぬ。ついひぢのつら、路のほごりに飢ゑ死ぬるたぐひは、數も知らず。取り捨つるわざもなければ、くさき香世界にみちゝて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬご多かり。況や河原などには馬車の行きちがふ道だになし」「あやしき事はかゝる薪の中に、丹つき、白がね、こがねの箔など所々につきて見ゆる木の割れあひまじり。これを尋ねれば、すべき方なき者の、古寺にいたりて、佛をぬすみ、堂の物の具を破り取りて、割り碎けるなりけり。濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをなん見侍りし」に至つては、五濁惡世の末法到來を如實に見て、厭離穢土の思想が強張されて居り、「源平盛衰記」の作者をして「誠に濁世亂漫の折に云ひながら、心うかりける事共なり」ミさへ嘆ぜしめてゐる。其の次に當時の人情描寫も云ふべきか、かゝる世にあつての夫婦、親子の情愛をいごもあはれに述べて居る。即ち「さがりがたき女男なご持ちたる者は、その志まさりて深きは、必ず先だちて死しぬ。その故は、我が身をば次になして、男にもあれ、女にもあれいたはしく思ふかたに、たまたま乞ひ得たる物を先づゆづるによりてなり。されば父子ある者は、定まれる事にて親ぞ先だちて死にける。又、母が命盡きてふせるをも知らずして、いごけなき子のその乳房に吸ひつきつ、ふせるなきもありけり」等が之である、尙「仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印ミいふ人、かくしつ、數知らず死ぬるごミを悲みて、ひじりをあまたかたらひつ、その死首の見ゆるごミに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける」ミ作者自身もこうした奇譚な行爲を喜んで書いて居り、佛ミ縁を結び佛國土に生れる事が當時の

せめてもの望みであつた傾向が善く現はれて居る。

第六章段には「元暦二年の頃、大なるふるこゝ侍りき」ミ元暦の大地震に就いて、「おそれの中に恐るべかりけるは、只なるなりけりこぞ覺え侍りし」ミ天災に對する恐怖を述べ「すなはち人みなあぢきなき事をのべ聊か心のにぎりもうすらぐかこ見しほぎに、月日かさなり、年こえしかば、後はこゝのはにかけていひ出づる人だになし、こ思はざるの世の人を愛ひ悲しんで居る。この章にも、無邪氣に遊んで居た武士の一人子が父母の眼前で家に押し潰され眼球が飛び出した様を記し「父母抱へて、聲も惜まず悲みあひて侍りしこそ、あはれに悲しく見侍りしが。子の悲しみは、たけきもののふも恥を忘れけりこ覺へて、いこほしく、こゝはりかなこぞ見侍りし」。こ作者の人間味豊かな所が偲ばれる。

第七章段の「すべて世のありにくきこゝ、わが身こすみかこのはかなくあだなるさま、かくの如し」ミ長明出家の動機を一句に纏めて居り、「もし狭き地に居れば、近く炎上する等、その害を遁るゝここなし。もし邊地にあれば往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし」ミ住み難き人の世を嘆じ暗に安住の淨土欣求を仄かしてゐる。

かくして「三十あまりにして、更に我が心こゝ、一つの庵を結ぶ」ミ第八章段の出家隱遁の項となり、「こころは河原近ければ水の難ふかく、白波のおそれもさわがし」ミ又「おのづから短き運をさこりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家を出で、世をそむけり。妻子なければ^{略中}何につけてか執をこゝめむ。空しく大原山の雲にいくそばくの^{イ、五カ}（へりの）春秋をか經ぬる」ミ鴨の河原で水難に追はれて大原山に隱遁したらしい。

次に「こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやぎりを結べるこゝあり」ミ九章段に續き現世は假の宿ミ云つた願生淨土を背景に持つた無常觀的主觀を閃かし、「前記の家を造るゝて寶を費し心を悩ますこゝはすぐれて

あぢきなくぞ侍るべきと相呼して居る。

第十章段に至つて「外山の閑居」の様を、年來の宿望叶つた満足さゝ安穩さを以て誇らしげに書かれてゐる「その西に闕伽棚を作り、中には西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光をす。かの帳のまじりに普賢ならびに不動の像をかけたなり」と西方彌陀淨土を信仰對象とせる當時の様が覗はれる。彌陀三十二相中の眉間の光に付いては、「觀無量壽經第九觀身心觀」に「眉光白毫、右旋婉轉、如五須彌山」と讚嘆して居る。彌陀と普賢、不動、との間に形式的な關係なきも、釋迦、文殊、普賢、等と捕はれて居ない處に又當時の民間信仰の一面が覗はれる。彌陀信仰と共にかなり古くから民間に行はれてゐた惡魔降服、行者保護、危災除けとして五大尊王の第一位たる不動の信仰が當時行はれてゐた事は時代柄さもあらんを頷かる。不動信仰を例證すれば、「不動明王に四臂の像あり。これは鎮宅修法の時のみ崇むと云々(鹽尻五十四)」とあり、「寶物集」三卷、「不動明王付證空本尊應驗の事」の條に、「大聖不動明王ハ惡業煩惱ノ怨敵ヲ防シ爲ニ降伏ノ相ヲ現ジ給フ者ナリ々(云々)」と、「宇治拾遺物語」五に叡山無動寺の相應和尚が比良山の西葛川の三瀧に日參して不動に召されて兜率の内院彌勒の許に行つた事が出て居り、「源平盛衰記」、龍神守三種心事の條に、文覺上人が熊野郡那智の瀧に打たれる時不動に守護された事が詳しく述べられて居る、同様に普賢菩薩に付ても「梵ニ鄴輪跋陀或ハ三曼跋陀、釋シテ普賢ト云フ(古事類苑宗教部)」「悲華經に」「我行要當勝諸菩薩賣藏佛言以是因緣今改汝字名曰普賢」(云々)とある「寶物集」第五(業障ヲ懺悔ス、付普賢菩薩懺悔教主ノ事)の條に、「普賢大士殊ニ懺除業障ノ願有テ懺悔ノ教主ト云ハレ給ヒ、有想ノ懺悔、無想ノ懺悔、刹利居士ノ懺悔、此三ノ懺悔ヲ教給ヘリ」と尙例を擧げて商人の間に信仰された様を述べて居る。「十訓抄」三に「書寫性空上人身ノ普賢ヲ見穢ルベキ由寢寐ニ祈請シ(中略)」此ノ時忽ニ普賢菩薩ノ形ニ現ジ六牙ノ白象ニ乘リテ眉間ノ光ヲ放チ

道俗貴賤男女ヲ照ス云々」も見えてゐる。本文に歸つて「北の障子の上に、ちひさき柳をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集、ミキの抄物を入れたり」、ミこの慧心僧都の往生要集は恒にダンテの神曲ミ好一對視されるものである。厭離穢土、欣求淨土の思想より、「往生之業念佛爲先」を強張した淨土門の上乗たる本書が長明に多大の影響を與へた事は想像するに難くない。次に「傍に琴、琵琶、おのおの一張を立つ」ミ長明の趣味が述べられてゐる。田中健三氏は「國語ミ國文學」(大正十五年四月號)誌上で方丈記に似通ふ作品を求めて「The Private Papers of Henry Ryecroft. (by George Gissing)」を得、長明の時代ミ、世紀末的幻滅の社會に出で、近代生活に對して、陰鬱な暗黒な人生觀を抱持してゐた彼英人ギツシングミは性格的にも時代的にも善く似て居るミ述べられ、殊にギツシングの茶ミ煙草に對する閑靜の味を述べた章句を引用し、長明の和歌ミ琵琶に對する趣味ミを比較した點は面白い。尙方丈記の天災地變の條ミダンテの地獄篇及び Ivanhoe (by Walter Scott) ミも比較して居る。安倍能成氏も「春秋文庫十六藤野滋氏譯「ヘンリ、ライクロフトの手記」の序文に、「この書物は私にはちやうど現代西洋の『徒然草』か『方丈記』の様な氣がする。それは自由な感想録であり、勝れた自然描寫である」云々ミ云つて居られる。

閑居の樣の中で「垣をかこひて園ミす。すなはちもろもろの藥草を植ゑたり」ミ藥草學の大家鑑真和尚を氣取つてゐる處は技巧に似たるも良い思ひ付きである。この外山の閑居は、四季の移りの形容に西方彌陀淨土の莊嚴や生活を眞似て、「谷しけけれミ、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る紫雲のごくくして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。かたらふ毎に死出の山路をちぎる。秋は目ぐらしの聲耳に滿てり。うつせみの世をかなしむかミ聞ゆ。冬は雪をあはれむ、積り消ゆるさま、罪障にたミへつべし」ミあり、善導の「晨朝禮讃偈」

中の「普勸弘三福、咸令滅五燒、發心功已至、係念罪便消、鳥華珠光轉、風好樂聲調、但忻行道易、云々」の思想も一派相通じ、眼前の風物を以て巧に佛教修養のよすがにいひなした點は作者の苦心が現れてゐる。「もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又耻づべき友もなし。ここさらに無言をせざれども、ひこり居れば口業をさめつべし。必ず禁戒を守るにしてもなければ、何につけてか破らむ」。こころを用ひずして持戒し得る境界の心安さを喜んでゐながら、其の間、行基菩薩の「山鳥のほろ／＼鳴く聲聞けば、父かこぞ思ふ母かこぞ思ふ」(梵網經六道衆生是找父母)の歌を引用して述懐して居る。「口業」に付ても、報恩經に、「一切衆生禍從口生。口舌者鑿身之斧也」云々誠である。

第十一章段では「身を知り、世を知れば、願はず、まじらはず、たゞしづかなるを望みし、うれひなきをたのしびます」云々、又かゝる住居は他人の爲で無く自分丈の爲に作つたのであるから、何等氣に掛ける處も無い云々、其の上自分の事は自分でする事の喜びを述べて「いかにいはんや常にありき常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らむ。人を苦しめ人を惱ますは又罪業なり」云々精進、慈悲、懺悔、報恩等の氣持が書かれて居る。「いかにいはんや」の語は「何況」の字を當て、漢譯佛典の常套語である。遁世せる彼自身は何事も宿命をなし「命は天運に任せて惜しまず」、「一期の樂しきは、うたたねの枕の上にはまり、生涯の望は、折々の美景に残れり」云々恬淡、無欲、無爲自然、悠々自適せる様は、捨世派の行者や竹林の七賢人を思はせ彼を評するに老莊の思想を以てする輩は（百科全書名著 解題の長明傳）かゝる點を捕へたのであらう。「それ三界はたゞ心一つなり」牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし」云々、古註には「八十華嚴經」の「三界所有唯是一心」十地論「三界唯一心。心外無別法」に依つたところある。彼の著、「發心集」の序に「佛ノ教へ給ヘル事アリ。心ノ師トハ成トモ心ヲ師トスル事ナカレト、實ナル哉

此言」も云つて居り是等は「唯識」の持論である。次に「おのづから都に出ては、乞食となれる事を耻づ」ミ托鉢を恥じてゐる様では眞の悟道者たり得ない云ふ點に於て一般の非難がある。

最後十二章段は「そもそも一期の月影かたぶきて、餘算山の端に近し。たちまちに三途のやみに向はむ時、何のわざをか、こたむとする。佛の人を教へたまふおもむきは、事にふれて執心なかれなり」ミ述べ、草庵を愛し、殊更閑寂ニ云ふ事に囚はれるのも罪障であるミなす所は、我執を迷ひの據根なりミし之を排斥する三論の思想ミ一致し、佛教の根本原理たる「色即是空、空即是色」の金線に近づいて居る「世を遁れて山林に交はるは、心を修めて道を行はんがためなり。しかるを汝が姿はひじりに似て心は濁りにしめり。住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりミいへぎも、たもつところはわづかに周梨繫特が行だにも及ばず」ミ自らを愧じ懺悔し續いて「自ら心に問ひていはく」を受けて自問自答體で結論に至つてゐる。即ち「もし、貧賤の報の自ら惱ますか。はたまた妄心の至りて狂はせるか」ミ煩惱、迷ひの根本即ち摩那識の主體を究めんミして得ず「その時心更に答ふるこみなし」で「たゞ傍に舌根をやミひて」請はず願はず只口に念佛せしか、即ち「不請の念佛兩三返を申して止みぬ」ミある。此の摩那識の依つて來る因を究めんミせし事既に非なりミ悟り、其れを捨て、稱へた念佛こそ法然の「知者のふるまひをせずして、只一向に念佛すべし」(一枚起請文、法然)の念佛に非ずして何であらう。豊田八十代氏は「維摩經ミ方丈記」(國語と國文學 第五十八號誌上)に、「その時心更に答ふるこみなし」を文殊菩薩が多くの聲聞菩薩を率ひて居士の病を問ひ、佛教の根本原理たる「不二法門」の如何なるものなるかを問答する事の條を叙し「終に維摩は默して語らず」ミあるこの「默」こそ不二門の言を以て説明す可からざる要義たりミし、又方丈記の「更に答ふるこみなし」の出處ミして居られる。表言型式を眞似たミ云ふ點に於ては御説御尤である。「不請の念佛」に就いて色々の説あるも大して深い

意味は無い様だ。「不請ノ念佛、此ハ俗語ナリ本義ト稍異レリ、俗ニ不請不請ト云ヒ、イヤ／＼乍ラ事ヲ作ス時ニ用フ、心ニサホド請ヒ望マズ但口ズサミニ念佛スルヲ云フコレ心ノ深カラヌヲ卑下シテ云ヒシナリ」ミ織田得能氏佛教大字典にあり、又「布施ヲナスニ未ダ施者受者施物ノ三輪相ニ於テ實有ノ見ヲ離ル、事能ハズ麤細ノ執心アルモノヲ、不請ノ淨施ト云フ」ミも説かれ、尙無量壽經卷上に「以ミ不請之法施諸黎庶」又同卷に「爲諸庶類作不請之友荷負群生」ミ、勝鬘經に「普爲衆生作不請之友大悲安慰哀愍衆生」ミ、同寶窟上末に「四乘衆生雖有根性樂欲未生不能請求菩薩昭機知其堪受即便爲說故言不請聞必得益自爲之爲友」等見えたり。普通「時に建曆の二ミせ彌生の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にして、これを記す」ミある次に載せられた、

月かけは入る山の端もつきかりき

たえぬひかりを見るよしもがな

の歌は、新勅撰集釋教に「十二光佛の心をよみ侍りけるに不斷光佛をよめる、」ミ題して源季廣の作ミして載せられて居る。大福光寺本には出てゐない。

四

如上に、方丈記を眺めて來る時、形式的にも内容的にも一大轉換を見た當代に於て、不可抗力視せられた厭ふべき、怖るべき末法到來の信仰が、戰亂、天災等により如實に顯現せられ、左様した五濁惡世の穢土を厭離する時代思想ミ長明の宗教的、内面的主觀ミが結び付き、彼をして厭世的人世觀を抱かした事は瀝然たるものである。この無常觀が纏て西方淨土を欣求する彌陀信仰ミなり、時恰も洛東吉水より起り京中内外を風靡した「一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節、久近念念不捨者、是名正念之業、順彼佛願故、」(善導觀經疏善散義)より「爲往生極樂」者以ミ南無阿

彌陀佛口稱念佛爲「第一之行」の大白旗を見るや其の法然の淨土念佛門の思想に導かれ、「當今末法現是五濁惡世、唯有淨土一門可通入一路」(法然選擇念、佛本願集)を體驗的に悟り、易修易行の淨土門に歸着したと見る可きは當然の行き方である。又其の間彼の思想に多大の影響を與へたこと云はれて居る、慧心の「往生要集」は厭離穢土、欣求淨土を前提に「往生之業念佛爲先」を繰返し繰返し強張して居る。

當時の末法思想に就ては、方丈記は勿論當代の諸文學書には擧つて時代表現の適切な形容詞として末世、濁惡の世五濁惡世、佛法王法滅盡の期、闢靜堅固の世、末法到來、よのすえ等多種多様に使用されて居る。殊に源平盛衰記卷二十七「天下餓死の條」平家物語卷三「廳の事」の條、扶桑略記、元亨釋書、及慈鎮の「愚管抄」(國史大系第七卷京)に詳しく出てゐる。尙、正像末の事は、沙門辨阿撰『徹選擇本願念佛集上』「第一篇及第六篇」(土宗全書第七卷八五頁、八九頁)釋良忠述『徹選擇鈔上』「每人師。云正法五百年事」(淨土宗全書第七卷一六頁)聖聰の『徹選擇本末口傳抄上』「第二篇下、曇鸞道綽二師出千像法之終末法之始等、同第四篇下、問大集經中云正法千年等、釋迦乃同可攝人師之中也等、入像法六百年等、難云此師乃至入像法經一百年豈不言像法之中乎等、隨則兩大師等、明知鸞師依此說云事等」(淨土宗全書第七卷一二九頁一三六頁)聖間の『傳通記糅鈔卷八』(淨土宗全書第三卷三〇一頁一七〇頁)其の他、道綽の『安樂集』傳教大師の『末法燈明記』橋川正博士著『日本佛教史』(一七〇頁)富森大梁氏「末法思想の信仰とその影響」(鎌倉時代研究三三一頁)等、尙彼長明作『發心集』「第八、下山ノ僧於川合社前絕入事」(大日本佛教全書二九九頁一三〇〇頁)に詳しく述べられてゐる。

五

流布本方丈記は後世の僞作であること云ふ説が可成り早くから稱へられて居たが、近年其れを組織的に論證されたのは、故藤岡作太郎博士である。博士は、著「鎌倉室町時代文學史」に流布本方丈記が源平盛衰記及び平家物語の

二書に酷似してゐる點等、數ヶ條を擧げて異説を立て、居られる。左に其れを表示すれば、

方丈記 安元の大火的の條 治承の辻風の條 福原遷都の條 養和の飢饉の條 元暦の大地震の條

源平盛衰記 卷四(京中焼失の事) 卷十一 前半は卷十六 卷二十七 卷十一

平家物語 卷一(内裏炎上の事) 卷三 後半は卷五 卷十二

外山、日野の庵室の様は、兩書「大原の女院の庵室」殊に盛衰記の文に酷似してゐる事。安元の大火的の年月は、方丈記の方が後に訂正して記したので正しいのであらう、この御推測『また方丈記には、玉葉集の「山鳥のほろ／＼」もなく聲聞けば、父かこぞおもふ、母かこぞおもふ」(行基)の歌を引ける所あり。山家集の「山深み、なるるかせぎのけぢかきに、世に遠ざかる程をしぞ知る」(西行)の歌を引ける所あり。また卷末にしるしたる「月影は入る山の端もつらかりき、たえぬ光を見るよしもがな」は長明の作にあらずして新勅撰集に出でたる、源季廣の歌なり。かくの如く方丈記には、他の書に類似せる箇所次ぐを以て、余はこの書は恐らく後人が諸書の一部を訂正補綴して作りなせる偽書にして、長明の作にはあらざるべしと信ず。但し異本は地水火風の變をしるせる條なく文章また拙く、順序も前後轉倒せる箇所あり。この方を長明の作にあらずと斷言する能はずと云つて居られる。

次に野村八郎氏は、藝文(京都帝大文)(學部月刊)に「方丈記再論」と題し、流布本方丈記の和漢の駢儷體は鎌倉末期より室

町時代に起つたものであり時代的に符合しないと、又氏著「鎌倉時代文學新論」(六三頁)には、方丈記が平家物語や源平盛衰記に似て居り、殊に、慶滋保胤の「池亭記」(本朝文)(粹十二)の全文を掲げ又數ヶ所抜書き等迄して方丈記との

類似點を擧げ以て流布本方丈記を後人諸書の一部を訂正補綴して作成せる偽書なり、と斷じて居られ、「若し尙略にして拙劣なる異本を眞作として長明を評せば、長明は思想家文章家として偉大なる人に非ざる事なる」(氏著、鎌倉時代文學新論、八六頁)とも云つて居られる。

是等兩氏の論據に對し、缺陷ある個處を指摘して新説を立てられたのは、後藤丹治氏である。氏は特に野村八良

氏を相手取り頑強に反駁して居られる。藝文、「方丈記管見」國史（立命館大學出版部昭和三年十一月十二日號）國文（三年十一月十二日號）「方丈記新説」がそれである。同氏に依るに、近年京都府船井郡高原村大字下山小字蕨、眞言宗末寺、大福光寺にて發見せられた（京都府史蹟勝地調査會告第四冊）嵯峨本系統である所謂大福光寺本の題簽に「方丈記」あり、殊に跋文に

右一卷者鴨長明自筆也、

從西南院相傳之

寛元二年二月

日

親快證之

ごある事より、其の形式や書體等、又別に親快の略傳、同書相傳の顛末、並に西南院との關係等迄考證して、大福光寺本が長明の自筆なり、と迄斷定して居られる。（國史と國文第四十五、六號）所が山田孝雄氏並に野村八良氏「大福光寺本方丈記に就て」（增補鎌倉時代文學新論、九〇、九一頁）の項で、大福光寺本に、誤字脱文ある事を指摘し其れが長明自筆の原本たる事を

疑つて居られる尙大福光寺本は鎌倉時代中期頃に出來たものとし最も信用の置ける古書であり、古典保存會より之を複製頒布してゐる。而し一般には十訓抄、第九の長明傳を信用して方丈記は長明の作なりとなし。國語調査會では「平家物語考」に方丈記を、平家物語、及び四部合戰狀本等と比較對照して「方丈記が平家物語を剽竊して作れるものにあらずして、寧ろ平家物語が方丈記の文を收容したるものなるべきを判定しうるに至るべきなり」と論じてゐる。如上の諸論より、私は天災地變、即ち四大の難の記述無く比較的簡略拙文な異本方丈記も、結構整然、文致巧妙な流布本方丈記も共に長明の作であらうと思はれる。即ち前者が土臺となり長明晩年に四大の地變等挿入し組織立てたのが後者の流布本となつたのであら異本（略本）には著述の年月なきも、長明は建保四年に死んで居り（流水抄説）流布本方丈記は其れより五年前の建曆二年に記されて居る。（流布本方丈記）

尙流布本の終に「時に建曆二年三月の晦日ごろ桑門蓮胤外山の庵にしてこれを記す」（イ十歳）とあり「外山の閑居」を述べた條に「もしつれづれなる時はこれを友として遊びあるく、かれは十六歳、われは六十云々」とある、方丈記の

みに依り長明の生年度を見るに、即ち建暦二年長明六十歳として換算すれば近衛帝の仁平二年壬申に生れた事なり「鴨縣主家傳」の記事と一致する。

六

方丈記には流布本と異本とがあり、其の内容に甚しく差異あることは前述の如きも、今其等の代表的なものを、三四擧げて見やう、流布本系には、

- 一、大福光寺本、(一冊古典保存會玻璃版本)
- 二、前田侯家藏古寫本一冊(前田侯所藏)
- 三、保寂本、寫本一冊(吉澤義則博士藏)
- 四、扶桑拾葉集本
- 五、羣書類從本
- 異本(略本)系には

- 一、彰考館本(水戸彰考館藏)
- 二、眞名本(吉澤義則博士所藏一種和臭漢文)
- 三、森本(森治藏氏、舊藏本珍書同好會より謄寫版を以て頒布す)
- 四、東京帝大本(東京帝大國語研究室藏)

等があり各々少し宛相違するは誤寫に依るならん。(天井幸助氏校正、講本方丈記筆參照)

註一、法華經行者の身體支持に就ては端坐の儀と北首右脇なる如來涅槃儀の兩儀があり北首右脇に關しては「如經所說、入滅作法不同凡夫頭北面西右脇而以遷化矣」(第四十二)とある(國史と國文、四十七號本朝法華驗記に現はれたる淨土教、能勢教明)氏民間習慣の屍安置に北枕西向とするは勿論北面の武士等も此處らの思想である。

註二、阿字は梵語アルファベット最初の字母にして哲理を示す重要な術語とされ、殊に密教では阿字其物が宇宙の實相であり神祕の本源であり功德の綜合であると、又阿字には有、空、中、の三義が含まれ、其れが即宇宙の眞理なりとし、又阿字を大日如来の一字眞言とし眞言王と稱し之を觀つる者が現身に佛たり得として重要視されてゐる。